

木造天守復元へのアプローチ



古川敏夫

■プロローグ

長い間かかって蓄積された来た伝統的
主題建築の再築はどれ程可能であろうか。
ただ伝統的建築を守り伝えていくだけで
は打開しないであろう。建築家、専門家
として設計実務や建築史研究など広範囲
にわたって精通し、指導していく姿勢が
求められていよう。ここで取り上げる福
島県白河市での小峰城三重櫓(天守)復元
のプロセスは、今日の建築界における一
断面であると共に、木造天守復元への一
里塚でもあります。復元へ至るまでの経
緯や係わりを余談を交えながらお話し
していくことにしましょう。前置きとして
少々、小峰城(白河城)のあらましなどを
ご説明することとします。

■小峰城の概要

現在、小峰城址となっている場所はJ
R東北線白河駅の目前にあり、東北新幹
線新白河駅から車で10分程度、東北自動
車道白河インターから15分程の位置にあ
って、国道4号線又東北新幹線からも眺
められます。現在は本丸と二の丸の一部
が残っていますが、江戸時代を通じて白
河藩の城下町を形成していました。小高
い平山城の頂きに三重三階建ての三重櫓
(天守)があり、今から約128年前の戊辰戦
争の渦中において焼失しました。白河口
の戦いは最も激烈な記録として残って
います。さらに、これより遡ること約240年
前、今日より368年前になりますが、会津
の支城を大改築する築城が初代藩主丹羽
氏によって開始されました。小峰城は江
戸時代を通じて最後期の城郭建築に入
ります。寛永9年(1632年)にはほぼ完成
した城郭です。復元にあたって調査対象
になった一つに現白河市蔵になっている
「御櫓絵図目録二巻」があります。復元作
業の出発となったこの辺りから、少し工
学部の若井正一助教授の言葉を借りて話
を進めることにします。

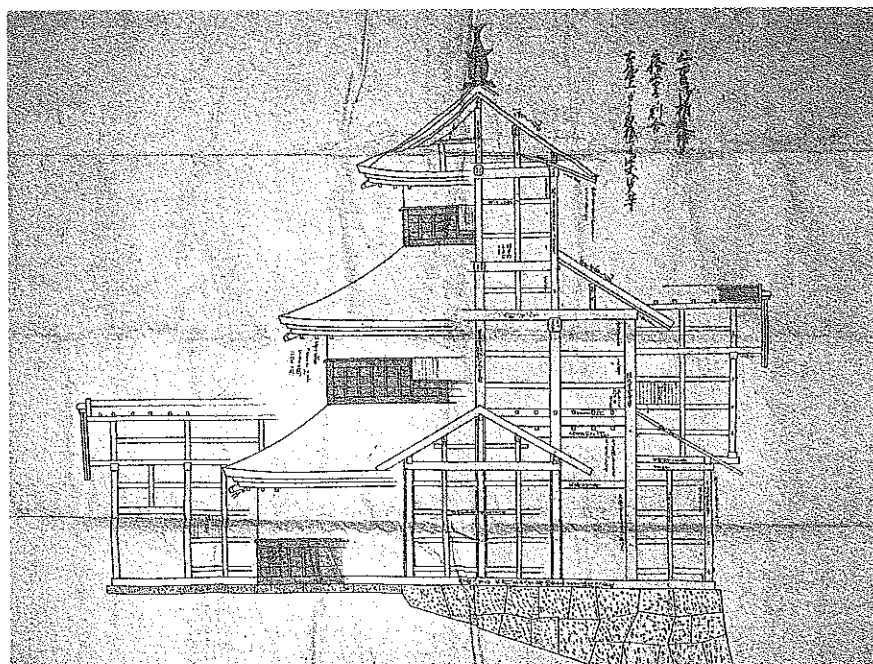
■復元に至る経緯(若井先生談)

奥州白河小峰城復元が具体化するまで
には、様々な紆余曲折があった。この復
元の動きは、昭和40年代にも市民運動と
して盛り上がったことがある。しかし、
その後の経済状況の変化などで、結果と
して具体化には至らなかった。それが、
今回無事に復元できたことは、まさに運
が良かったとしか言いようがない。実は、
城復元の話は私が市より「白河の関」の
再現計画を研究委託された昭和61年頃か
ら始まった。それ以来、白河市の担当者
と私は城復元の夢物語を何度も語り合
っていた。このことが、いつしか市の執行
部の間でも話題となり、復元の可能性が
検討されることとなった。その後、市長
の命により市の担当者とは、既に復元
が進められていた山形城等の現地調査に
奔走した。白河市が、城の専門家でない
私に委任した理由は、白河が私の郷里で
あること、亡父が市の官吏であったこと

等のためであろう。私にとって、城の復
元計画は非常に責任の重い仕事であった。
当初は、市の担当者として城の復元をす
ることも覚悟していた。幸い、復元に必
要な資料の所在が分かり、間もなく、市
の有識者を中心とした建設検討委員会が
発足した。この頃から、市民の間にも復
元の気運が高まり、有志より寄付が集
まり始まった。私が復元のために奔走し、
思案していた折、当時、建築学会の副会
長であった近江栄先生に相談を持ち掛け
た。全ては、近江先生と私の共通の教え
子がいる神戸で決断された。その後の復
元に至る順調な流れは、日本大学建築系
OB組織の奥の深さを改めて痛感させら
れた。

■絵図との出会い

昭和62年(1987)12月初め、近江先生
から一報が入りました。明日、研究室へ
来れるかとの連絡でした。お城の再建に
ついて意見を聞きたいので白河市担当者



三重櫓建絵図

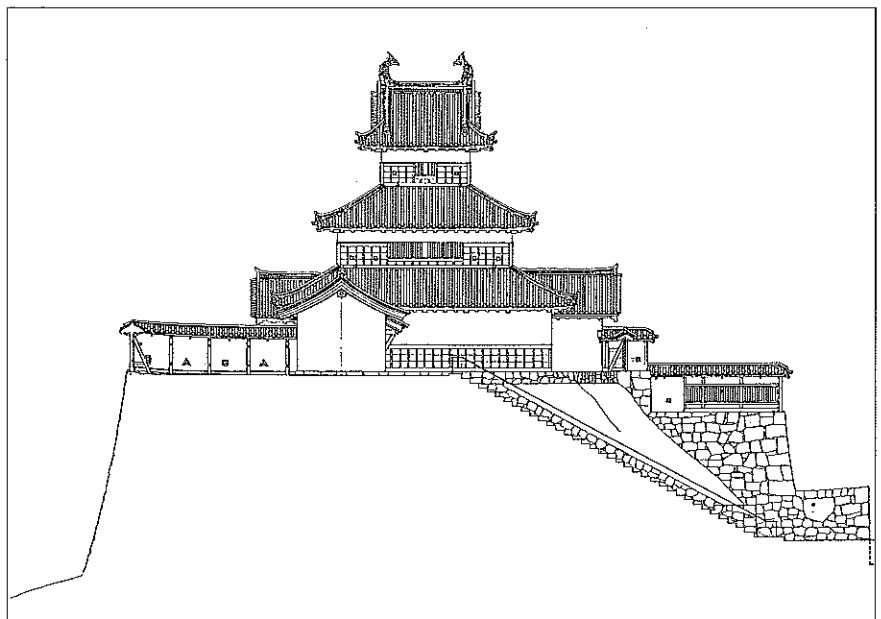
の方々が工学部若井先生を介して研究室に来訪するとのことであった。明るる日、近江研究室へ出かけ、市側担当者との会合をもった。テーマは一枚の天守絵図の真憑性の問題であった。市側によれば、この程の絵図は城内各建物について描かれており、二巻の巻物に装丁されているとのことであった。持参して来た絵図はコピーであったが、再建にあたり本物であるか否かの判断が必要であった。再建方法の意見として地元では、RC造による方法、もっと規模を大きくした模擬天守の方法、少数意見とは言え木造による再建という議論もあって剣が峰にあったらしい。この絵図について真憑性が高いという判断を下したが、残る問題は絵図の出所と経歴を確かめなければならないことと、つまり、絵図の成立した年代を明らかにし、三重櫓（天守）の復元の年代設定をしなければならないことであった。以前から多少、城郭の設計や復元の仕事に携わって来た経緯はあるが、腰を据えて懸らねばならぬ思いがした。城郭再建については一つのコンセプトとして、本物思考の復元が出来ないだろうかという思いは前から抱いていました。当初から観光目的でなく、地域の歴史に根ざした歴史資料としての価値の再発見として捉えることが必要であります。戦後の焼失天守再建では大都市での再建天守についてRC造やS造による復興がなされて来た。現在では、地方小都市でもその先例に倣い模擬天守造りが行われているのが現状であります。話を戻しますと、そういう経緯で早々近江先生と白河市を訪ずれ、小峰城を検分する運びとなりました。ちょうど那須連峰から横なぐりの雪が舞って来た厳寒の日であった。

■市制40周年記念事業として

明けて昭和63年（1988）正月早々より基礎資料調査に入ることになりまして、同年4月ごろまでに検討を行うスケジュールでした。三重櫓復元の基本設計、概要書、完成図の作成を急ぎ進めることになりましたが、各公立図書館、財団文庫、大学図書館などの調査を開始しました。その後、5月ごろより市教育委員会によって三重櫓跡地の事前発掘調査が始まり、市へお願いして工学部若井研究室の学生を助手として、遺跡への立ち入り調査並びに採取資料の実測や整理を進めた。現存する天守の調査、東北各地の城郭調査

に走り廻り、歴史資料調査を短時間で終わらせることが出来ました。白河城郭については建築史家による研究が未発表であったことには驚かされた。地味になりがちな中小都市での近世建築史研究は、ほとんど進んでいないのが実情ではないでしょうか。基本設計の最終段階に入って一つの確信を持つに至りました。三重櫓を木造で復元出来るということであった。幸い市内の稲荷山公園にある杉の古木（樹令400年程）が老木化し危険になった為伐採することになり、復元に使用する目鼻も付いた。私は近江先生に歴史資

料収集と調査、考証がほぼ完了して竟永築城時にまで遡った木造による本格復元が可能である旨伝えることにした。工学部の若井先生にも同様に連絡を取り、その後市側と調整に入り再建にあたっては築城当時のまま木造で復元することの意義を申し述べた。出来るだけ当時のままの姿で忠実に再現することは、白河市の歴史的事業として、後世の文化財として伝えていくことになり、市制40周年記念事業として最もふさわしい選択であったと思っている。



三重櫓西側立面図



外観 北東面

■復元へ向けて

復元事業については、専門委員会が設置され設計者側では日本大学理工学研究科を窓口とし、理工学部近江教授が指導され、工学部若井助教授（現在）が市側との調整にあられた。監修は城郭の権威・東工大名誉教授藤岡通夫先生にお願いをした。早速、藤岡先生のお宅に市側担当者として伺い、心良くお引受け下さることになった。現存する絵図や城郭について幾多のご示唆を仰ぐことが出来、大筋で賛同していただくことが出来た。現地での懇談を持つ為、9月初旬に小峰城址にお出かけ戴き、協議を終って無事帰路に着かれた、ところが、高齢の為2ヶ月後に体調をくずし急逝なされ、三重櫓復元監修が最後となられた。いろいろお話ししていく中で、明治生まれの方の豪快さと懐の大きさには感心させられた。私は復元作業と共に並行して小峰城郭の小論文をまとめて来た。平成3年（1991）6月ごろ、近江先生を通して碧水社から原稿依頼があり、小峰城郭の復元及び考察とディテールについて「復元大系日本の城」第一巻北海道と東北編、第九巻城郭の歴史と構成の中で現代の城郭復元としてまとめる機会をもった。復元図や復元の詳細については、ぎょうせい出版から発行されており参照して戴ければと思います。その中で、復元に於ける重要な原則を四つほど書きました。復元設計は十分な遺跡調査と歴史資料調査に基づかなければ出来ないことであり、その考察と考証が必要になります。

■復元事業の概況について

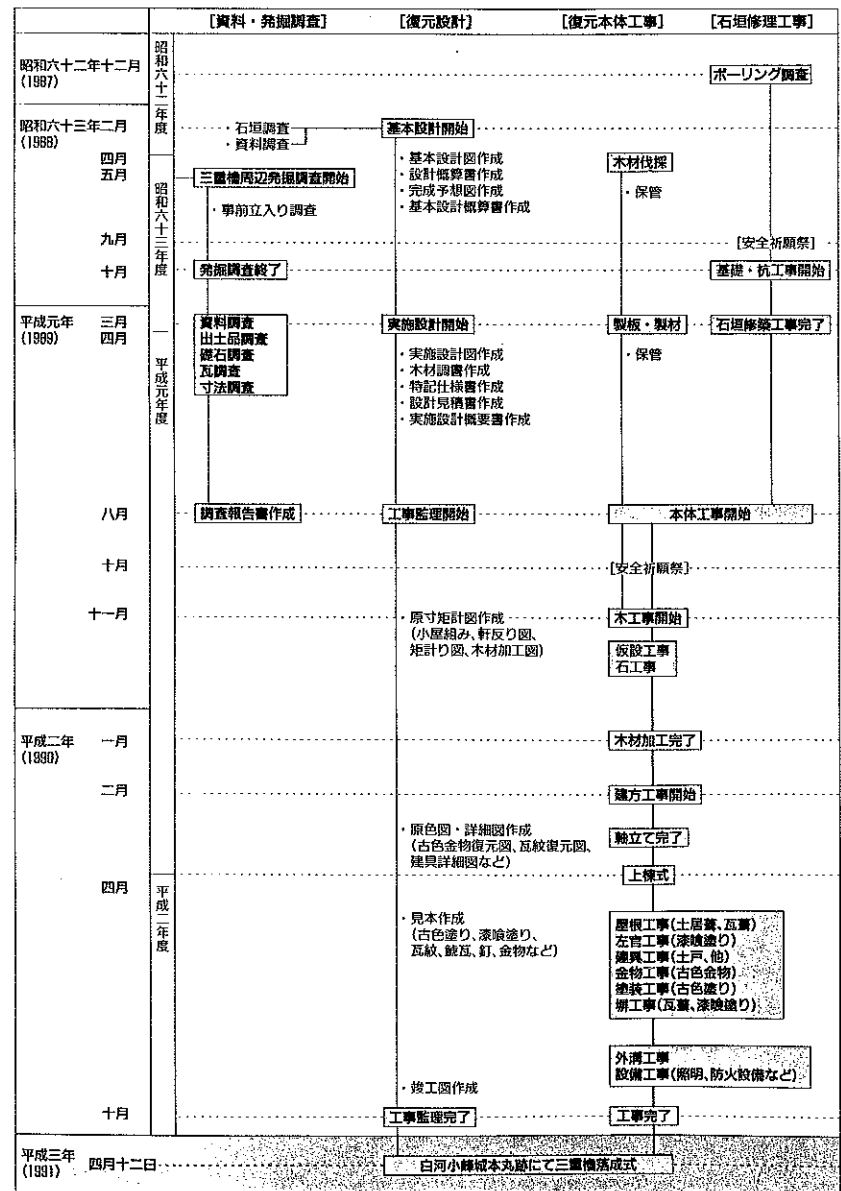
復元事業については三重櫓復元が第一期として、その後第二期として本丸前御門が復元されております。三重櫓復元が昭和62年（1987）12月から平成2年（1990）10月まで、前御門復元が平成3年（1991）9月から平成6年（1994）3月までに完了致しました。小峰城郭の全体像は研究成果として検証しており、今後も城跡として良好な保存状態にある本丸部分の櫓や城門についての復元が予定されております。市によって徐々に小峰城周辺の整備事業も進められ、大型バス、マイカー駐車場の工事やJR東北線白河駅と直結する地下道の建設もあり、受け入れ体制も出来つつあります。白河市にとって息の長い復元事業となりますが、完成すれ

ば東北随一の城郭建築となり、築城当時の威容のある美しい姿が出現することでしょう。尚、三重櫓に設置した夜間照明ライトアップについて、平成3年度照明学会の照明普及賞を受賞いたしましたことをご報告致します。又、小峰城址や三重櫓、前御門他の見学につきましては、白河市都市計画課（0248-22-1111代）までお問い合わせ下されば、くわしく対応していただけることと思います。

■筆者略歴

- 1972年 日本大学理工学部建築学科卒業
- 同年 東京大学工学部建築史研究室入学
- 1974年 伊藤建築設計事務所を経て、松井建設株式会社建築部設計課に入社
- 1982年 竹林舎建築研究所に設計部長として入社
- 1985年 日本建築研究所を創設 代表となる
- 1990年 ㈲日本建築研究所に改称 代表取締役として現在に至る

三重櫓復元のプロセス



※上記表は発掘調査、資料調査、復元設計、建築本体工事、石垣修築工事の概要で、昭和六十二年十二月から平成二年十月まで、ほぼ三年の復元プロセスを示している。